



第51回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会
The 51st Annual Meeting of the Japanese Society for Cutaneous Immunology and Allergy

モーニングセミナー1

皮膚バリアを考える

座長

朝比奈 昭彦 先生(東京慈恵会医科大学)
多田 弥生 先生(帝京大学)

演者

石氏 陽三 先生(東京慈恵会医科大学)
「痒みと皮膚バリア」

鎌田 昌洋 先生(帝京大学)
「皮膚バリアを考えたアトピー性皮膚炎治療」

日時

2021年11月28日(日) 8:00～8:50

会場

B会場【京王プラザホテル 4F 花A】

本セミナーはWEBでのライブ配信もおこないます。
視聴方法は学会ホームページ (<https://jscia51.jp/>) をご覧ください。

NOV

痒みと皮膚バリア

東京慈恵会医科大学 石氏 陽三 先生

痒みは搔破を引き起こす不快な感覚と定義され、様々な刺激で誘発される。慢性的な痒みは、アトピー性皮膚炎などの病的な乾燥肌をベースとした皮膚疾患や腎臓病などの全身性疾患にしばしば生じる。その痒みは、重度になると睡眠障害を来すなど患者の生活の質や社会的・経済的側面に大きな影響を及ぼす。そのため、痒みを十分に制御することが重要である。近年、そのメカニズムの解明が進み、痒みの伝達機構が明らかにされてきた。皮膚バリア機能障害に伴う痒みには、Mas関連Gタンパク質共役型受容体、transient receptor potential (TRP)、ケモカインなどの多くのメディエーターと受容体が関与していることが明らかになり、乾燥肌による痒みはヒスタミン非依存性の経路が重要であることが知られている。また、痒みは、搔破行動を引き起こし、搔破により表皮への外的な刺激や障害が加わり、interleukin (IL)-33やTSLP (thymic stromal lymphopoietin)などのalarminが産生されTh2型の反応を促進させると同時に、これらは末梢神経に直接作用して痒みを惹起する。さらに最近の研究では搔破刺激自体も末梢神経に直接作用して、痒みを惹起している神経メカニズムも報告されている。これらは、前述の化学的に誘導される痒み (chemical itch) と比較して、機械的な痒み (mechanical itch) と呼ばれている。この機械的な刺激で誘導される痒みは、痒み過敏を呈しているアトピー性皮膚炎などで特に問題となる。この通常は、機械的刺激で誘導されない痒み刺激で痒みが誘導されてしまう痒み過敏の状態は、alloknesisと定義される。このような機械的な痒みの神経伝達経路は、化学的な痒みの神経経路とは明らかに異なることが知られている。これら末梢から生じた痒み情報は、脊髄後角を通り、最終的には脳へと伝達される。脳内では、視床や腕傍核を經由して、体性感覚野、運動野、扁桃体、側坐核、腹側被蓋野など様々な脳部位が活性化する。前述のような痒み過敏の感覚異常メカニズムには、中枢性感作が関与していると考えられている。本講演では、主に皮膚のバリア機能障害や機械的な痒みを中心とした痒みのメカニズムを概説する。

皮膚バリアを考えたアトピー性皮膚炎治療

帝京大学 鎌田 昌洋 先生

アトピー性皮膚炎の病態において、Type 2サイトカインによる炎症、そう痒とともに皮膚バリアも重要である。アトピー性皮膚炎の治療には様々なものがあるが、それぞれがバリア機能の回復に与える影響は異なる。この講演では、アトピー性皮膚炎治療に注目し、ステロイド、タクロリムス、デルゴシチニブなどの外用薬、光線療法、デュピルマブが皮膚バリアに与える影響について整理し、皮膚バリアも考えた治療戦略を考察する。